



# 小象フラワの 悩み



ななしむし

小象のフラワはため息混じりでお母さんに言いました。

「ねえ、お母さん、僕達象はどうしてこんなにずんぐりむっくりな姿をしているのかな？ 蟻さんみたいに小さい体だったら色々な所に遊びに行けるのになあ。このこと以外にも他のみんなが羨ましくてしょうがないんだ。僕最近象でいることが何だか嫌に思えてきちゃったんだ」

それを聞いたお母さんは

「私は私象であることを誇りに思っているわ。でも、あなたが今感じてることに対してはどうしたら良いかわからないわ」と困った顔で言いました。

フラワがすっかり困り果ててしまったその時お母さんは何かを思いついたかのような仕草をしてこう言いました。

「そうだわ、あなたにはたくさんのお友達がいるからそのお友達に会ってお話をしてみたらどうかしら？もしかしたら何か良い意見を聞けるかもしれないわよ？」

そのことを聞いたフラワは初めはあまり乗り気にはなれませんでした。家にずっと閉じこもってばかりでは気が滅入ってしまうと感じたのでお母さんの言うことをすんなり受け入れました。

フラワは早速旅行の準備に取り掛かっていました。フラワのお友達が住んでいる「みんなの森」は少し遠くなので一泊二日の日程を組むことにしました。

「えーと、地図と枕とリュックと水筒、それにご飯は明日お母さんに準備してもらおうから今はいいとして・・・」

初めての一人旅ということもありフラワは念入りに荷物確認することにしました。

出発の当日お母さんはふらわのために昨日夜から一生懸命準備した手作りのお弁当をフラワに渡しました。

「あなたの嫌いなタマネギもしっかり残さず食べるのよ」

「うん、大丈夫だよ。残さないでさちんと食べるよ」

いよいよ出発というその時、お母さんがさつきから手に持っていた見慣れない箱から緑色とも青色とも赤色とも言えない不思議な色をした綺麗な宝石の首飾りを取り出しました。そしてフラワの背後に回り首飾りをフラワに着けながらこう言いました。

「この首飾りはお母さんがお父さんと結婚する時におじいちゃんからもらった大事な首飾りだけど、旅立ちのお祝いとしてこれをあなたにあげるわ」

フラワは思わず

「わあ、素敵な首飾り！本当に綺麗だね。僕これとても気に入ったよ。絶対無くさないように大事にするね。ありがとう、お母さん。じゃあ行ってきます。」

「行つてらっしゃい、くれぐれにも怪我だけには気をつけるのよ」  
フラワはとことこ少し歩いては後ろを振り返り、また歩いては後ろを振り返りました。  
家からだいぶ離れましたが後ろを振り返つてみたら、お母さんがまだ手を振つてるのが  
見えしました。

3

せつせつと歩くこと数時間、フラワはお友達に住んでいるみんなの森にやっとたどり着  
きました。そこで地図を取り出して

「まずここから一番近くにあるカザリキヌパネドリのピーノ君のお家へ行つてみよう」  
と言つてさらに歩き始めました。

そしてピーノの家に着いたフラワは

「ピーノ君、あなたのお友達の象のフラワが来ました」

と森の木々がびつくりするぐらい大きな声で呼びました。

すると木の上でお昼寝をしていたピーノは飛び起きてフラワの方へばさばさと色とりど  
りの翼を広げて飛んで来ました。

「フラワ、久し振りだね。どうしたの？何だかあんまり元気が無さそうだけど？」

と少し心配そうに質問しました。

「僕、最近象でいることがあまり好きではないんだよ。君みたいに素敵に翼を羽ばたかせ  
て大空を自由自在に飛んでみたいよ。それに君はオペラ歌手のように声が綺麗で、たく  
さんお歌も知ってるね。羨ましいなあ」

と羨ましそうに言いました。

「綺麗な翼をしてると森ではとても目立つから怖い敵からよく狙われるし、空を飛ぶの  
は翼をたくさんバサバサ動かさないといけないからとても疲れることなんだよ。逆に僕  
は君みたいな大きな体で堂々と地上を歩いてみたいよ。それに君は大きなトランペット  
みたいな音を出せるじゃないか。僕の方こそ君が羨ましいよ。あ、いけない。もうこん  
な時間だ。早く行かないと約束の時間に遅れてしまう。もう出発しなくちゃ。フラワ、  
また何かあったらいつでも遊びにおいで。君が僕に話したことだけどもあまり考え過ぎな  
いほうがいいよ」

とピーノは口早に言つて太陽が輝いている方角へ飛んで行き、しまいには何にも見えな  
くなつてしまいました。

4

さつきピーノに褒められたことが意外で何だか狐に捕まれたような気がしていましたが、  
気を取り直して他の友達を尋ねてみることにしました。するとちやうど向かい側から誰  
かが歩いてくるのを見えました。

それはなんとフラワの大的なお友達であるライオンのシシイでした。

「おや、フラワじゃないか！ずいぶん久しぶりだね。毎日君に会いたいと思つていたんだ  
よ。今日ここで君に会えて本当嬉しいよ。でも君は何だか浮かない顔をしているね」

とシシイが言いました。

それを聞いたフラワは最近の悩みをシシイにも打ち明け続け様にこう言いました。

「君はその逞しい脚で他の動物を追っかけてその鋭い牙を使って噛み付きむしやむしやとあの美味しそうなお肉を食べるんだね？ かつこいいいな、狩りなんて。僕なんてそこらへんに生えている草をただ黙々と食べるだけだもん。僕も君みたいに狩りをしたり、おいしそうなお肉を食べてみたいよ」

それを聞いたシシイは

「なんだ、そんなことかい。君、狩りってやつはそんな甘い憧れだけでできるほど生優しいものではないのだよ。生まれて間もない頃からお父さんとお母さんに厳しく教えられて大きくなってやつと一人前に狩りができるようなるんだよ。生活がかかっているからとても大変なことなんだ。僕こそ君みたいにのんびりと黙って草を食べていたいよ。ここだけの話だけど僕はあまり他の動物のお肉を食べたくないんだよ。生きていくためだとは言っても心の奥で深い悲しみを感じてるのさ。君にはちよつと難しかったかな」と悟った賢者のような面持ちで話し終えた後に

「実は僕今狩りの最中だから、せっかくだけでもこれで失礼するよ。今日は君に会えて本当に嬉しかったよ。また今度ゆっくり話そうよ」  
と言つてこの場からすぐに立ち去つてしましました。

フラワは自分の考えがとても子供じみたものだと感じとても恥ずかしい思いがしました。

気が付くと辺りは闇に包まれ始めていました。フラワは暗い所があまり得意ではないので月明かりを求めて森の近くにある丘を目指して歩き始めました。暗くて足元に石がごろごろ転がっているような道でしたがフラワは難なく麓に辿り着きました。そこではお月様が照らしくくれる明かりのおかげでフラワはほっと胸を撫で下ろしました。フラワはとっさにこの前の誕生日に買った腕時計に眼をやると短い針が9の位置を指していました。

「わあ、大変だ。もうお休みの時間だ。早く寝る支度をしなくちや」とひとりごとを言つて寝る準備に取り掛かりました。そして準備が終わり寝所に着いてそつと月に語りかけました。

「お月様、いつもみんなが寝ている夜の間明るい光照らしてくださいあってありがとうございます。僕は本当に感謝しています。僕もお月様のように明るく輝いてみんなのため光を照らすことができたたらどんなに素晴らしいでしょう。それに一晩中寝ないで起きてることでできたらどんなに楽しいことでしょう？」

するとお月様は少し悲しそうな顔をしてこう言いました。

「私はあなたがすごく羨ましいですよ。私はいつも独りぼっちですよ。しかも生まれてから一度もお昼というものを見たことがないんです・・・」

フラワはお月様が何だか気の毒な気がしてきたので「お月様、変なことを聞いてしまつてごめんなさい」と深々と頭を下げて謝りました。

それを聞いたお月様は

「わざわざ私のことなんかを心配してくれてありがとうございます。あなたは本当に優しいんだね」と優しい表情で微笑みながら言いました。

夜もだいたい更けてきたのでフラワはお月様にお休みの挨拶をして再度寝る準備をしました。草むらに寝そべり満天の星空の星々を一つ一つ数えていたらいつの間にかに寝ていました。

6

その晩フラワはこんな夢を見ました。

それは黄昏時で、あたり一面は茜色に染まつており、フラワはただっ広い草原に一本だけ生えている大きな楠の木の老木に寄りかかりながらその楠の木に少し不満気にこう話しかけていました。

「ねえ、長老様、僕はどうしたら他の動物になれるのかな？」  
すると楠の木は

「あなたがいくら望んでもあなた以外の何者にもなれないのだよ。どんなに頑張つて努力したとしてもあなたはあなたにしかなれないのだよ。ゆえにあなたはあなたのままでいい」

フラワはこの言葉を聞いた途端自分の中で何かが変わるのを感じました。

「そうか、僕はこの事を知るためにこの世界に生まれてきたのかもしれない。いや、きつとそうに決まつている」

感動のあまりその場から動けずじまいのところ上空からカザリキヌバネドリが群れが楠の木の枝に止まり祝福の歌を歌い始めたその時フラワは夢から眼を覚ましました。

すでに空には太陽がさんと輝いており、その傍らで鳥達が朝の訪れを賛美して合奏会を催していました。

フラワは朝の光を全身で浴び

「夢だったのか」

と少し残念な思いで呟きましたが、夢のなかで楠の木から聞いた言葉を思い出しすぐ

に元気になりました。家へ帰るための準備をしている際に忘れ物はしてないかと再度

辺りを見回している時に昨日枕を置いたすぐ隣の場所に楠の木の幼木が生えているのを見つけました。

フラワはすっぴん嬉しくなつてしまししい帰り道を我を忘れて駆けてゆきました。